

monthly JÔDO

2011

9

September



法然上人信仰会

陸然上人を歩く

二十五霊場十三番

清水阿弥陀堂

〔睡眠の時十念を唱ふべしといふ事を〕

阿弥陀仏と

とこえ

十声唱えて

まどろまん

わふり

長き眠と

なりもこそすれ

（法然上人御作御詠歌）

老少不定は世の習いです。何時どこでどんな事が起こってもあわてないように、平素からお念仏に励みましょう。そして夜眠る前には必ず、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と十遍のお念仏をして眠りにつきましょう。たとえそのまま長い眠りになっても、悔いのないように致しましょう。これはお念仏を信じる人達のたしなみであります。

2011年表紙 雲中供養菩薩（東京白金・戒法寺蔵）

仏師 鈴木禮次郎

浄土

2011/9月号 目次

いのちの無常と来世への希望①	梶村 昇	2
東北に念仏を弘めた人々③	鈴木聖雄	12
会いたい人 加藤健一さん②	関 容子	18
法然上人をめぐる人々	石丸晶子	26
響流十方	林田康順	34
快僧渡辺海旭	前田和男	38
誌上句会	遺者＝増田河郎子	44
マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	47
編集後記		48

表紙裏・法然上人を歩く＋表紙の人

背表紙裏・法然上人を歩く清水阿弥陀堂



表紙題字＝中村康隆前浄土門主
アートディレクション＝近藤十四郎
協力＝迦陵頻伽舎

いのちの
無常と
来世への
希望

1

梶村昇

亜細亜大学名誉教授

法然上人鑽仰会
公開講演会

概録

東日本に大変な震災があつて、二万数千人という方がお亡くなりになりました。心から哀悼の意を表したいと思います。

昨日も、今日も、余震が続いて、東京にいる我々も、ハッと思わせられているわけですが、考えてみますと、我々はこのように、本当にグラグラ、グラグラしている上に一瞬の安らぎをむさぼっているというような感じがいたし、今さらのように仏教の言うことを考えさせられているわけでございます。

お釈迦様は諸行無常ということを説かれました。今日私に与えられた題は「いのちの無常と来世への希望」ということです。

私は、これを出されまして、さすが、法然上人鑽仰会の方々は頭がいいと思いました。いのちの無常というのは、今の私たちです。まさに累卵の危うさの上に、一瞬の安らぎをむさぼっている。これがいのちの無常だと思えます。しかし、その無常だけではいけないので、それが来世への希望というものが一緒になっている。それは宗教そのものの、仏教そのものです。だから、鑽仰会が出されたテーマというのは、仏教とは何かという、そのことを尋ねている、問うていると思われました。

最初に「釈尊と現代」ということを話します。仏教というのは、お釈迦様が悟りを開かれた、それによって仏教が興こっているわけです。

そうすると、お釈迦様は何を悟ったのかということになります。私たちはよくお釈迦様が悟りを開いたと言いますが、お釈迦様は何を悟ったのでしょうか。答えは「縁起の理」ということです。「縁起」です。

この縁起というのがなかなか難しく、**「縁起がいい」とか、「縁起が悪い」とかいう縁**

起ではないのです。

縁起というのは、文字どおり縁によって起こっている状態。例えば、今、私がここで話をしています。ですから、皆さん方はそこに座って聞いていらっしゃる。皆さん方がここにいらっしゃるといのは、私がしゃべっているという縁によって、そこに座っているという状態が起こっているわけです。

皆様方が聞いていらっしゃるから、私はここでしゃべっているの、皆様方がだれもないところで、私はしゃべらないのです。

ですから、皆様方がいるから私がいる。私がいるから皆さん方がいるという、これが縁起です。あらゆるものは、そういう縁によって起こっている状態だというのが、お釈迦様の悟りです。

よく考えてみますと、お釈迦様は大変なことを悟られたというふうに思うのです。そのことを少し順序立てて話をしてまいりたいと思っております。

現代は科学時代

今は科学時代で、何でもかんでも、科学、科学と騒いでおります。科学というのはどういうことでしょうか。

科学というのは事実を研究する学問です。事実はず原因があつて結果があります。

この世の中で、原因と結果のないもの、そんなものありますか。あらゆるものは、原因があつて結果があるのです。結果があつて、それがまた原因となつて結果が出るという。

世の中は全部原因と結果だと思ふのです。

お釈迦様が悟ったのは、そのことなのです。今の科学がやっていることは、その原因と結果を明らかにしようということです。そうすると、今の科学の根本を明らかにしたもので、それがお釈迦様の悟りじゃないかと思ふのです。だからお釈迦様の悟りというのは、この世の存在そのものがどういうものなのか、という存在の根源を悟られたというなのです。そして、今の科学は遅ればせながら、そのお釈迦様の悟りを跡付けているのだと思ふのです。

ところが私の孫などは、科学をやっていますから、科学が発達すればやがて宗教はなくなると申します。けれども、科学がいくら発達して、いくら展開しても、宗教がなくなることはないのです。ここが一つのポイントです。

なぜかと言いますと、この世の中は全部原因があつて結果がある。私があつて皆さんがいる。皆さんがあつて私がある。こういう関係です。

だから、今私がここににいるというのは、そういう関係のほいろいろな因縁によつてここにいるのです。

私の親が産んでくれた。私が朝ごはんを食べた、そんなあらゆるものの因縁によつて私はここにいます。

そのあらゆるものの因縁、仏教の言葉でいうと多因縁。今の言葉で言いますと、「多因縁の相関関係」と言っているのですけれども、その因縁を全部、科学が立証できますか。それはとてもできません。どんなに科学が発展しても科学は宗教を超すことはできません。それでは、科学とは何かという。「現代の科学」がやろうとしていることは、今言つた

ように、事実を研究することです。その因果論だということです。

この頃は、大学で余り言わないのですけれども、私たちのころは、一九〇〇年の終わりのころですが、日本の学界は、科学分類法ということが盛んに言われました。

例えば、ドイツのウィルヘルム・ヴントとかリッケルトとかいう学者が科学分類法というのをやり、それが日本にも伝わってきました、科学をどのように分類するかということが盛んに言われました。

釈尊と現代

釈尊の悟り——縁起の理——因果論

現代の科学——事実研究——因果論

1 形式科学（数学）

2 実質科学

イ自然科学（天文・物理・化学→生物・医学・心理学など）

ロ精神科学（社会科学——社会・経済・政治・民族学など）

（人文科学——歴史・文化・言語学など）

3 哲学（理性的認識）・芸術（絵画・音楽・文芸など）・宗教

これは一つの例です。最初に「形式科学」というのがあります。これはどういうことかと言いますと、研究対象に質のないものです。簡単に言うとな数学です。数学は二足す二は四ということになります。

ちよつと問題を出します。一人で仕事をすると十日かかる仕事がある。それを二人でや

ると何日でできるかという算数。一人でやると十日ですよ、二人でやれば半分でできるの
で五日ですよ。これが数学の答えです。ところが、世の中、実際にやらせてもらんなさい。
一人でやって十日かかるのを、二人でやったら本当に五日で終わるでしょうか。

これは、この二人というのは全く同じ能力を備えた二人でしょうか？ 一人が何にもで
きない人だったら、いくら二人になったってどうにもならないでしょう。この二人とい
うのは、体力から、何から何まであらゆるものが、全く同じということを想定しているわけ
です。その人が二人いると五日でできるということです。

これは、皆さんそのとおりだとおっしゃるけれども、論理です。理屈です。そのように、
数学というのは論理なのです。理屈なのです。

三角形の底辺の midpoint を、当然皆さん midpoint があると思われるでしょ。中点というのは、点
なのです。点というのは面積があつてはいけません。面積があると円なのです。

点を打ってごらんない、こうやって。それを顕微鏡で見てごらんない。円になつて
いるのです。だから、それは点じゃないのです。点を打ってごらんない。幾ら打つた
って、面積があるのです。

だけど、数学はそれを点と言うのです。面積のない物と言うのです。位置だけあつて、
面積がない物と言うのです。しかし世の中に、位置だけあつて、面積のない物があります
か。ありません。ありませんが、数学ではあるのです。

というのは、それは論理の世界、理屈の世界なのです。だから、数学というのは「形式
科学」というのです。

実質がない物、論理なのです。だけど、その数学が基になって今日の科学ができてい

のです。それで科学の分類の中でも「形式科学」というのだけは一つこう、脇に置いておくのです。

その次です。「実質科学」です。「実質科学」というのは質があるのです。研究する対象の質がある。その「実質科学」を二つに分けまして、「自然科学」と「精神科学」とに分けます。

「自然科学」というのはどういうものかという、たとえば天文学です。天文学というのは、きちっと回るのです。本当に、数学で研究したように回るのです。だから天文学を研究するとお月さんまで行けるのです。そして宇宙まで行ったのです。これは大変な成果です。原因があつて結果を突き詰めたのです。

その次は物理学。例えば、家を一軒つくる。そこには建築学、そういうことも全部入っています。今私たちがいるこの建物も、ちゃんと、これだけの人がいても底が抜けないようにできているのです。これは、ちゃんと計算でできているわけです。

その次が化学。例えば H_2O 、私はこれを中学の実験で習いました。本当に、水素2と酸素1を合わせたら水ができました。私がやっても、隣のA君がやっても、誰がやっても水になるのです。こういうのを化学というのです。つまり、必ず、誰がやっても同じ結果がでるもの。それが科学です。

逆を言うと、誰がやっても同じ結果にならない物、それは科学ではありません。

その次、生物学。生物学も自然科学です。しかし、生物学になってきますと、アラスカに住む生物とアフリカに住む生物は違いますから H_2O のように、化学のようにきちっとした答えにはなりません。

その生物学の次は医学。医学になると必ずしも同じになりません。大体、この薬を飲めというのは医者判断です。医者判断というのは、誰も同じ判断を下すわけじゃないのです。十人いれば十人違った判断も下すかもしれません。ですから、医学というのは科学とは言ってもなかなか、科学とは言いにくい面があります。

その次、心理学。今、はやりの精神医学とか、何とかか何とか言う方がさかに偉そうにおっしゃっていますが、テレビで、心理学者だなんて自負している方の言うことが当たるときもあります、当たらないときもあります。それは科学じゃないのです。

「自然科学」というのはそういうものの系列です。とにかく、人間の有機的な、人間的なものが入ってくると科学にならないのです。

無機的なもの、H₂O、酸素と水素とか、そういうようなことになると科学になりますけれども、ちょっとでも人間的なものが入ってくると、だんだん、だんだん薄らいでくるのが自然科学です。

今度は「精神科学」。「精神科学」をまた分けると、社会科学とか人文科学に分けられるのですが、この社会の仕組みを研究するのは、社会科学です。

この社会の経済を研究するのは経済学。経済学なんてね、学と言えましょうか、あれは経済研究です。

経済学で経済の学者の言ったとおり世の中やってごらんなさい。経済がうまくいきますか、いきませんよ。

確かにいくときもありますけれども、昔の総理に、この前の福田総理のお父さん、福田赳夫さんがいらっしやいましたが、あの人は経済が専門の方で、よく、「私は経済の福田

でございます」と言っていました。

ということとは、どういうことかと言うと、福田さんがやればうまくいくということなのです。「経済の梶村です」じゃ、誰も信用しない。だけど、「経済の福田です」と言うから、ああそうかという。これは個人技でしょう。個人技ということは科学ではないです。

この人がやったらうまくいくけれども、こっちの人はうまくいかないって、そんなのは科学ではありません。

政治学なんかそうです。政治学の言ったとおり、今の政治がなりますか。全然ありません。今日も辞める辞めないの話ばかりではないですか。

そんなものが政治学なんかになりやしません。だけど、少し当たるときがあるのです。だから、科学のような顔をして、社会科学だなんて言っているのです。

もう少し我々は、社会科学に対して厳しい目で見るといいです。民族学もそうです。私はそれを「科学もどき」と思うのです。「もどき」ってこれは私の悪口です。科学ではない、科学らしい、「うめもどき」みたいなものですよ。「科学もどき」の学問だというのが、私の経済学、政治学に対する悪口なのです。

悪口を言われたくないならば、必ず同じ結果、だれがやっても、AがやってもBがやっても同じ結果が出る、結果を出さない。出せなければ「科学もどき」です。もどきまでいかない、科学研究です。単なる研究だと思えます。

それが、人文科学になりますと、たとえば歴史学。戦後の日本は歴史学として、歴史を科学として解こうという風潮が非常に流行って、あらゆるものを、例えば、唯物史観で決める。そういうのが流行って、歴史を科学と言ったのです。

しかし、歴史は科学じゃありません。歴史というのは、人間そのものだと思うのです。歴史がもし科学なら、これから先、私たちの将来が全部わかるはずです。我々の歴史がわかっていては、生きている意味がない。わからないからこそ生きているのです。

その次、文化・言語学。こういうのは、私は研究だと思っています。単なる研究。

きょうも一番初めに、東日本大震災のことを申し上げましたが、東日本にこれだけの震災があるということを、これだけ科学が発展しているのにだれが言いましたか？ だれも言っていないです。だれも予告していないのです。だから、地震学は科学ではありません。結果が出ないのですから。

福島地震の確率はゼロ、浜名湖の、東海地震の確率は八十五%。だから八十五%の浜名湖の原子力発電を止めた。こっちはゼロ。ところがゼロのほうの地震が起こって、八十五%のほうが起こらないのです。だから、地震学は科学ではないと、僕は思うのです。

これは、えらく大勢の人にしかられるかと思いますが、私は予告のできないものは科学とは言えないと思うのです。

だから、先ほどH20で水になったというのは、あれはだれがやっても水になるのです、だから科学です、ということです。

これが、今科学のやっている世界です。そこに哲学とか、芸術、宗教と書いてありますね。これは科学の手に負えない世界なのです。だから、これは別建てなのです。

そこに、対象が無機的な自然。要するに、人間が絡まない、そういうものから、人間が絡む有機的なものに移ってくるにつれて、科学的正確度が薄れてくる。そして、宗教に拠らざるを得ないということです。

(つづく)

東北 念仏 弘めた 人々 を に

鈴木聖雄

すずき しょうおう

山形県谷地誓願寺住職

村山地名研究会代表幹事

アラハバキ学会副会長

東北アイヌ語地名研究会理事

舞草刀研究会理事

著書『奥羽近代念仏験記』

『無能和尚行業記併びに行業遺事』

③

奥羽を駈け巡った 無能上人

これまで、『近代奥羽念仏験記』や『勸化道場奇特集』などの記録から、無能和尚かしょうの念仏勸化のありようや、その現益とも言うべき靈験談などを採りあげて来ましたが、上人が歩まれた地域などを今一度辿ってみたいと思います。

当初の正徳三(一七一三)四年(一七一三)の住いが、伊達郡北半田に在ったことから、この頃は、近くの桑折大安寺に於ける勸化であつたり、田村郡三春法蔵寺での夜念仏興行での法話が主体でした。法蔵寺は時宗寺院なのですが、その寺には七日間滞在し、この時の日課誓約者は千二百人余、名号を乞う者数知れずとあります。

正徳五年(一七一五)の三月(註・旧暦)には、村山郡藤助新田安養寺、同郡溝延宝泉寺へと巡錫、四月には、同郡谷地誓願寺、五月には大町東昌寺と寒河江正覚寺、六月には左沢法界寺と先の安養寺・正覚寺の再化を行っています。特に左沢法界寺の場合、「毎席聴徒一万から一万五千人。日課受者一万余」とあることから、周辺の村人が殆んど押し寄せた感があります。

また、寒河江正覚寺に於ける勸化では、「四十八夜の臨終念仏」という語が見受けられ、当時の法話の内容が窺われます。

続いて七月には、谷地誓願寺と安養寺を往復し、七月二十三日から八月三日までは、誓

須賀川市・無能上人家の矢吹家
(現在)



桑折無能寺（かつて正徳寺と
称したが、上人の偉業を讃え
無能寺に改名）



桑折無能寺に祀られる上人の墓



清延法泉寺の上人像

願寺にて再勸化、『せんやく選択集』の講説が行われました。この時の聴衆は、少ない時で千有余人、多い時には二万余に至る、と載せてはありますが、会所の規模を考えると些か不明な点も生じます。

ただ、この勸化で起こった奇瑞現象は、「正徳五乙未歳從七月廿三日至八月三日於羽州谷地誓願寺法談中參詣之聴衆勝境拝見注進之記録」として、八十一例が『勸化道場奇特集』に綴られており、集落名と人名から、後裔の者まで探ることが出来ますので、通可のみの者までと考えれば、理解も可能です。

八月八日からは安養寺での法筵でしたが、同寺に於いては三度目の勸化となっており、地域全体が上人の法話や結縁の念仏で、法悦に浸っていたものと想像されます。当日は、七座の法話中、日課誓約の受者が八千八百五十人と載せていることから、宗派や他村者などの隔てもなく、或いは、幼児や歩けぬ老人の分まで含まれているようです。

同月下旬には、天童三宝寺や、山口来運寺、荻野戸の庵へと繰り広げられています。この時起こった奇瑞現象も『勸化道場奇特集』に全て載せる訳ですが、そうした上人巡錫地を訪ねると、各所に名号碑が建ち、「無能」の文字と花押が刻まれており、村の「守り神」として崇拜されております。また、会所の寺院内には木像の上人像が祀られ、最近までは「無能講」なる講まで行われていました。

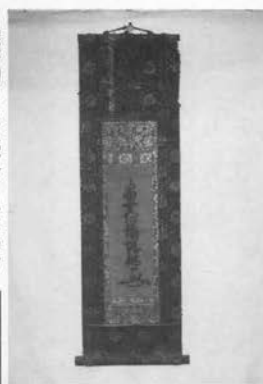
この年、即ち、正徳五年は、羽州といわれた山形側での勸化が殆んどでした。後半の九月十月の二か月は、山形城下や上山、そして山野辺の浄土宗・時宗の寺院で催され、その有様を上人自身、次のように書き残しております。

「……羽州最上、奥州伊達、処々勸化の間、障碍^{しやうがい}之れ有ること無く、帰依の聴徒、毎座少なくは一千二千、多くは一万二万。想うに是れ往生浄土の機縁純熟し、本願広顕の時節到来の故ならんと呼。法席都て二百七十六会、日課念仏新たに受者六万八千三百二人。勝境拝見、瑞夢感得、正念往生、現罰現証等注し送れる者七百四十六箇條。亡慮^{おくりご}（註・凡その意か）之れを記し調卷十二に至る矣。……略」（『近代奥羽念仏験記』）

正徳六年（一七一六）に於ける巡錫は、伊達郡の藤田大千寺を始めとして、同郡染川^{やな}称名寺、保原浄運寺を巡っております。

この頃の住いは、伊達郡の東奥である小島に移って、塞耳庵^{そくじ}と呼んでいましたが、正月

日課誓約として授与された名号
符（高さ23センチ）



福島市松川の畔に建つ名号碑



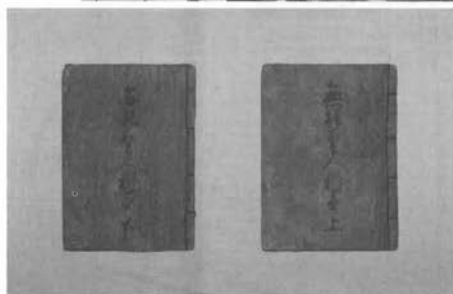
の元日から七日までの間に百万遍念仏を成し遂げたのもこの庵でした。
該所はまた、海側である宇田郡との要衝地でもあり、両郡には、先述した名越派寺院も
多く点在していましたから、それ等寺院からの要請に応えるべく居を構えたのかも知れま
せん。

従って、正徳六年の三月から六月までの四か月は、相馬領内を巡って法筵を開いており、
聴衆の村人は、羽州での勸化同様五千人から一万人或いは、二万人と記しております。
相馬から、一度は小島の庵に戻るのですが、隣村である伊達郡川俣東円寺の要請により、

天童市青柳家に残る消息文



天童市矢吹家に残る写本



八月には再勸化に出掛けられています。

無能和尚の巡錫で特徴的なのは、この再勸化（再化）という点です。一か月後には再度興行する事例もあり、勸化の内容が心魂を揺るがすものだったようです。

年号が変わり、享保元年九月には、三春法藏寺での再化があり、十月には福島到岸寺、十一月に至って、伊達郡保原浄運寺を会所に行っています。享保二年五月、安達郡本宮に滞在中、おこり（註・マラリア熱か）を患い、北半田の庵に戻るようになりました。一時回復したようですが、享保三年（一七一八）の春からは身体も衰え、それでも不臥の姿勢で只管念仏を称える毎日を通じてはおりましたが、十二月二十五日、門人を集め没後の次第などを指示し、この日からは身体も横に臥して、遂に翌年一月二日に入寂されました。三十七年のご生涯でしたが、後に上梓された『無能和尚行業記』には、「抑、勸化の最初より終焉の時節まで、日課同所（註・奥羽での会所のこと）の数を計るに、総じて十六万九千百七十余人を得たり。……略」と載せており、日課の念仏を約束させながら、浄土の教えを弘められた真実の捨聖でしたから、尊敬せずにはおられません。

— 完 —

連載

会いたい人 関 容子



撮影/タカオカ邦彦

俳優小劇場養成所の入試に合格した加藤さんは、久しぶりに故郷の静岡県豊浜に帰り、両親に思いの丈を訴える。

「半年前に大阪の会社をクビになったことも、その後東京へ行つてることも報告してなくて、取敢ずそれから言つて、劇団受かったんでついでに授業料一年分、十何万円だかをください、つて言つたら親父が怒つてね（笑）。将棋盤投げつけられて、ずうーつと説教が始まりました。当時は杉村春子先生にしても滝沢修・宇野重吉先生にしても芝居では食べて行けないで、映画の脇役でどうにかつてたのを親父も知つてたんでしょね。そんなことを今さらやつてどうするんだ、つていうわけです。それで僕も言い返して、そのころはそんな情熱があつたわけでもないのに、一生をかける覚悟がある、みたいなことを言つてるうちに、だんだん本当にその氣になつてきましてね、おかしいことに」

加藤さんは高校の演劇部時代、たった一本

出演しただけのキャリアなので、御両親も寝耳に水だったのだろう。

「それも作つたばかりの演劇部で、顧問の先生が選んだ戯曲『さつば夜ばなし』（竹内勇太郎作）、これは狸の親子と狸師が出てくる、民話劇ですね。僕はそこに狸師の役で出ただけです。体育館のガサガサした中だったし、手探りで始めてそのまま終つてしまった、という感じ。別段これから役者になろうとは夢にも思いませんでした。それが親父に反論してる間に本氣になつて……その晩は寝て翌朝起きたら親父はいなくて、お袋が黙つて封筒を渡してくれたらちゃんと金が入つてました」ところで、浜育ちの加藤さんは、少年のころから鯉の刺身が大好物だった。とりわけ新鮮でモツチリとした歯ざわりがこたえられない「モチがつお」は、故郷以外では食べられないという。

モチがつおというのは、そういう種類があるわけではなく、釣った直後に血抜きをする



小沢昭一さんからの褒められた「審判」を演じる加藤健一さん。

特別な処理のし方で、モチモチツとしたおいしい鯉に仕上がるそうだ。

歌舞伎の『髪結新三』で朝湯帰りの新三が気前よく初鯉を買う場面があり、それを大家さんに振舞うと、「うめえうめえ、まるで餅を食うようだ」と舌鼓を打つが、これは理に叶った褒め方なのだと納得した。

「脂の乗った小ぶりのやつを、僕は薬味なんか使わずに醤油だけでガブリといくんです。おかしいのは、親父はあんなに僕の俳優志願に反対したくせに、僕が三十歳で初めて演じた一人芝居『審判』（バリー・コリンズ作）を観たあたりから認めてくれたらしく、その後、静岡近郊で何か芝居をすると言くと、チラシを送れ、と言ってきて、あちこちに配ったり、映画やテレビ出演がわかると知り合いに電話をかけてPRしたりなんかしてました」

そのころはもう自慢の息子になっていて、加藤さんがたまに帰省するとモチがつおで歓迎してくれる。

「それもわざわざ親父が自転車で隣り町まで行って、本場のを買ってきてくれるんです。うまかったし、有難かったですね」

『審判』は加藤さんの俳優人生の出世作とも言える大事な芝居だが、二時間半一人でしゃべりっぱなし、というこの大変な演目に挑む気になったのは、養成所時代、小沢昭一さんの一人芝居の稽古を熱心に見ていたせいもある。

「あのころ俳小の稽古場には中二階のバルコニーがあつて、僕はそこから小沢さんが『説教板敷山』の稽古をなさつてるところをしょっちゅうのぞき見してました。お坊さんの節談説教をそのまま舞台に乗つけるというもので、聞いてて字がわからないままに書き取って、よく真似をしてました。小沢さんのあの声と調子が好きなんです」

『審判』の最初の公演から再演を重ね、二十年后に上演した折のプログラムで加藤さんは

恩師小沢さんと晴れて対談をする。その席で加藤さんが決めぜりふの「山も山、道も昔に変わらねど、変わり果てたる我が姿かな」の件りを言ってみせると、小沢さんが「ああ、よく覚えています」と受け、続けて機嫌よくこんなふうには解説する。

「そこを節をつけて、ちよいと昂揚させて言うわけです。すると、お寺だと、聞いているおばあさんたちが、みんなそこで『なんまんだぶなんまんだぶ』と合掌する。これは歌舞伎のいいところで『音羽屋』と声がかかるのと同じですね。これを『受け念仏』というんですが、これをやって演者と聴衆が合体するというのが節説教の妙味のひとつでもあるし、聞く者もまたそうやって半分参加するという楽しみがあるんです。よく覚えていてくださいました」

そこで加藤さんは、当時から落語とか浪曲とか一人でやるものに興味があり、小沢さんの『板敷山』が非常に強く刷り込まれていて、

それが『審判』上演へとつながって行った、と述べる。

小沢さんは、『審判』を選んだ着眼点が素晴らしい、と褒め、柔らかなものはテレビにおまかせして、演劇は骨のあるもの、地味なもの、暗いものをやるパートがなきやダメ。人間を深く掘り下げると生と死の問題に行きつく。そこに居直る人として僕は君に期待する、と後輩にあたかなエールを送っていた。

さて、加藤さんと『審判』との出会い、新宿紀伊國屋書店の演劇書売り場での立ち読みからだった。読み始めたらやめられなくなり、その場で一冊全部読み終えて、すぐにその本を買った。

「ドイツ軍の捕虜になったロシアの将校七人が、修道院の地下に閉じこめられて六十日間置き去りにされる、というすごい話ですからね。生存するためには一人ずつ肉体を仲間食料として提供してゆく以外、道はないわけです。まずはくじ引きで一人、また一人が殺

されます。それから自殺したり、病死したりする者も出る。結局生き残った二人のうち一人は発狂していて、もう一人は正気だった。そのヴァホフ大尉が陪審員席、つまり客席に向かつて審判を問うわけです。読んでるうちに涙は出てくるし、身体は震えてくるので大変でした。その本を買ってすぐに近くの喫茶店に飛び込んで、またもう一ぺん読み始めたんですが、最後まで涙が止まらなかった。本であんな衝撃を受けたのは初めてでしたね』『審判』の舞台を私は平成十二年、下北沢の本多劇場で観た。そのときのプログラムが手元にある。

「人肉食の話だし、笑いは一か所もないし、暗いし重いし、客席はずっと緊張を強いられるから、疲れたでしょう（笑）」

でもただつらいだけの芝居ではなくて、人はあのような極限状況に置かれても、信じ合ったり愛し合ったりできるのだ、というところに救いがあった。名作と言われるゆえんだ

ろう。

それにしても、たとえばせりふに詰まったときでも誰一人助け手のない一人芝居に、なぜ加藤さんは魅かれるのか。

「旗揚げに一人芝居を選んだのは、お金がなくてほかの役者にギャラが払えないからとか、たとえ失敗しても自分一人の責任で気が楽とか、いろいろあるんですが、しかし一人芝居の醍醐味は、お客さんが僕一人を観てくれる、ってことです。これが快感なんですよ（笑）。役者っておかしなもので、複数で舞台に出てると、僕じゃない他のやつのことをお客が観てるなと思うと、こっちへ引っぱりたいために余計な芝居をしてみたり、しまいには人の芝居を食ったりする。それがいやらしいですよ。ただ、一人芝居は楽屋が寂しい。舞台に出てしまえば大勢のお客さんが相手ですから、いいんですけど」

今後、『審判』の再演はあるのだろうか。

「まだファイナルと銘打った公演はしてませ

長男、加藤義宗さん（左端）と『コラボレーション』で共演する加藤健一さん（中央）。



んから、何とも言えません。この間やはり本多劇場で風間杜夫さんが『カラオケマン』とかの五本立てで、一人芝居五時間というのを観てきました。すごい喉してるなと思って触発された。さすがに終りのほうは声に来てたんで、酒控えたほうがいいですよ、って言ったら、酒やめるんなら芝居やめる（笑）、って言ってましたけど、ウソでしょう。しかし風間さんのは歌ったり歩いたり笑わせたりして発散できますけど、『審判』は証言台に立ちっぱなしで、七万語のせりふをしゃべりっぱなしですからね。役者にとって非常に苛酷な芝居なんです」

加藤さんの長男加藤義宗さんよしむねも俳優として舞台に立っている。平成八年『私はラッパボーイじゃないよ』（加藤健一事務所公演）が初舞台で、今年二月『コラボレーション』（同）では父が作曲家のリヒャルト・シュトラウス、子が彼を追いつめるナチスの将校役（長身で恰好いい）で迫真の父子共演だった。「まさか息子が役者になるとは思ってませんでした。最初の『審判』のために僕は事務所を設立したんですが、まあ事務所と言っても自分のうち（笑）。そのときはもう義宗は生まれてましたね。切符の予約の電話がかかってきても僕が出て、御本人ですか？ って訊かれて、まずいなと思ったり、義宗が泣き出して慌てて電話口を手でふさいだりしてました。彼は三つくらいから僕の芝居は全部観ています。二、三列目の席で観てて、あ、お父さんだ、お父さん、なんて何度も言うんで、休憩時間に楽屋へ呼びつけて、お前のせいで

今日の芝居はメチャメチャだ、って怒鳴ってましたから、芝居が嫌いになっちゃうかな、と思つてたら、あるとき自分もこの道に進みたい、と言ひ出しましたからね」

『コラボレーション』のプログラムに義宗さんの談話が載っていた。

「最初のうちは役者があんまり好きじゃなかった。しかしだんだん芝居と自分との距離が近くなり、父親との摩擦が感謝の気持ちに変つて行つて、近ごろは父ともちゃんと向き合えるようになった」

加藤さんが息子のために「モチがつお」を喜んで手配する日も、きっと近いことだろう。

（つづく）

加藤健一事務所次回公演
音楽劇「詩人の恋」

10月25日（火）30（回） 下北沢・本多劇場
問い合わせ 03・3557・0789

「法然上人をめぐる人々」

師を慕う 親鸞

石丸晶子

挿画・佐野芳朗



連載

第三回

ハッとして、親鸞は戸口に――

七

ハツとして、親鸞は戸口に目をやった。
と同時に、

「お師匠様、帰ってまいりました。善太郎で
ございます。お師匠様」

善太郎が大声で叫んでいる。

「おおっ」

赤子を抱いたまま親鸞は戸口に駆けよった。

「待っておったぞ。待っておったぞ」

門を開けるのもどかしい気持ちで親鸞は
戸を開いた。

開いた戸口からサツと雪が吹き込んでき
た。と思うや、中に転がり込むようにして、
外の冷気を身に纏った善太郎が入ってきた。

周囲の空気が急に冷たくなった。

「帰ってまいりました」

善太郎は土間に膝をつくときりかえした。

「おお、ご苦勞であった。待っておったぞ」
そういうと親鸞は、善太郎の肩に手を置い

て、

「寒かったであろう。早う囲炉裏にあたって
体を温めよ。暖をとりながら都の様子を聞こ
うぞ」

師匠に勞わられ、それまでの緊張がゆるん
だのか土間に膝をつく十九歳の若者の頬に一
筋の涙が伝わった。

「道蓮様からはご返書を預かってまいりまし
た」

若者は涙を拭った手で、胴巻きから皺がよ
った一通の書状を差し出した。

「お預かりしましたご返書を、道中、失いで
もしては一大事でございます」

書状に皺がよっているのを気にするらしく
善太郎は言い訳した。

「そればかり気にして胴巻きに入れてまいり
ました」

「そなたには苦勞をかけた。さ早う、囲炉裏
にあたられよ。都の話はそれからだ」

「お師匠様に聞いていただきたい都のことが

たくさんあります」

善太郎は親鸞を見上げて答えた。

抱いていた赤子を恵信に預けると、親鸞は善太郎とともに囲炉裏に向かいあった。

「ご苦労であった。道中、雪に阻まれてどんなにか難儀したであろう」

囲炉裏の薪を掻き立てて、親鸞はくり返した。パツと薪火が赤々と、いかにも暖かそうに熾おこった。

そんな熾おこき火を満足そうに見ながら、親鸞は鉄の火箸で薪をついでいたが、恵信が白湯を持ってきたのを見ると、

「法然上人様はご健勝であられたか」

善太郎に尋ねた。

「法然上人様にはお目にかかり、師匠（親鸞）のお手紙をさしあげました。勢親房様が御取り計らいくださったのでございます」

「おお」

思わず嘆声をあげた親鸞の目から、ふいに

涙がこぼれた。

「道蓮様の御返書をお読みくださいませ」

薪火で部屋が暖まり、善太郎が一息ついたのを見て、親鸞は灯火に身をよせ、道蓮の返書を披ひらいていった。

八

「親鸞御房におかれましては、師僧法然上人様のご健勝をお案じになり、道中難路のなかを早速にご使者を立てられました御志、まことに尊く、信蓮房様そして都に残っておられましたお弟子方はじめ、わたくし道蓮、深く感じっております」

板戸の隙間風がときどき灯火を揺らめかせている。

ジジッと灯心が燃える音がした。

親鸞は道蓮の返書を読み進んでいた。

「……ただ、間もなく年が明ければ師僧は八十におなりでございます。過去五年間、ご高齡の御身での流人のお暮らしの中、お疲れが

ご赦免になってどっと出て来られたようで、吉水にお帰りになられて以来、とかく病床に臥しておられます……」

巻き戻し、巻き進んでは道蓮の返書を親鸞は読んで行つた。

「……親鸞御房がご存知の吉水の草庵は、かの法難以来、朝廷に遠慮しなければならぬために手入れができず、また京に残された弟子たちも住まうことができぬまま、無人の草庵となつてすっかり荒れておりました。で、ご赦免になつて法然上人様が帰京されましたも、元の草庵には到底お住まいになることができる状態ではなかったのでございます」

道蓮の手紙は続いた。

「このような窮状を青蓮院の慈円僧正様がお知りになり、朝廷のご赦免が出るやいなや、かつての吉水の草庵とは地続きの、東山大谷にある青蓮院様御所有の土地と草庵を、師僧にお譲りになりました。そこで、箕面の勝尾寺からご赦免にされました師僧は、慈円僧

正御心遣いの東山大谷の草庵に帰られ、今、法蓮房様、勢観房様、その他のみ弟子たちとともに、この草庵におられます……」

読み終えた親鸞は、返書の皺をていねいに延ばしながら巻き戻すと、善太郎に、

「道蓮殿の返書には、『委細は善太郎殿に話した』とある。善太郎、法然上人様のこと、お弟子たちのこと、都のこと、どんな些細なことでもいい。話してくれ」

「この胸にもあまりに多くのことが溢れていて、どこからお伝えすればいいか分かりませぬが」

若者は言つた。

九

「都は越後で想像していた以上のところでございました。わたくしは都に四日おりましたが、大路という大路はそれはもう大勢の男女で賑わつておりました」

彼は一瞬瞳を輝かせて、



「越後の田舎とは違って美しい方々が多く、道蓮様の御連れ合いの満様もそれは美しい方で驚きました」

「いかにもそうであろう」

親鸞はかすかに吐息を洩らした。十九歳の若者が、吉水よりも都の賑わいに心奪われたとしても仕方なかった。

「法然上人様の草庵にも町の男女がそれは大勢押しかけておりました」

「わたしが都にいる頃もそうであつた」

親鸞は頷いた。慈円の『愚管抄』や藤原定家の『明月記』によれば、建久のころ（一一九〇―一一九八）から法然上人のうわさは次第に庶民にまで及んで行き、「愚痴無智の不可思議の尼入道」が押しかけて「繁盛に繁盛を重ねて」いたという。

「道蓮殿の住まいはすぐ分かったか」

「吉水のためとの長屋にお住まいでございました。親鸞様の書状を読まれた道蓮様は、すぐ勢観房様のもとに行かれ、親鸞様のご書状

と、わたくしを遣わされたことをお話になったのでございます」

親鸞の胸に、今年二十九歳になる勢観房源智の清雅な姿が浮かんできた。

勢観房は法然上人鍾愛の弟子であつたが、かの法難にさいしては流罪を免れ、法蓮房信空などとともに、京にあって法然教団を守っていた。法蓮房も勢観房も、誰も彼もみな、なつかしい法兄弟であつた。

親鸞が一瞬、思い出に心を馳せていると、
「勢観房様は実に清らかな感じの、美しい御僧であられました」

感嘆しようすで善太郎は言った。

「京に到着した二日後に、勢観房様の御計らいにて法然上人様にお目にかかりました。お上人様はそれまで布団に臥せておられたご様子でしたが、道蓮様とともにわたくしがお部屋に入ってまいりましたときには、勢観房様に御体を支えられて床に半身を起こしておられました」

古き伝統技 三代にわたる信頼

有限
会社

浄土宗法衣専門 古島法衣店

〒111東京都台東区元浅草4の2の1
電話(03)38421289
振替0018012145231

「おお」

親鸞は頷いた。

「わたくしを見て微笑まれ、『善信房(親鸞の吉水時代の房名)も長い流人の暮らしでさぞ苦勞したであろう。しかし、家族ともども達者な様子で喜んでゐる』、と仰せでございました」
その時のことが心に甦ったらしく、善太郎はしばし言葉を切った。

「あのとき仰いだお上人様のみ姿。真実ハッとするお優しさで、親鸞様にどのようなお伝

えすればよいか、わたくしには言葉が見つかりません」

「そうであろう。そうであろう」

涙がふたたび、親鸞の頬を伝わっていった。

善太郎は語を継いで、

「阿弥陀如来ご本願への信心をいつそう深くして、お念仏一筋に生きよ。との御言伝をいただきました」

親鸞は懷から懷紙を出すと、深く頷きながら溢れる出た涙を拭った。

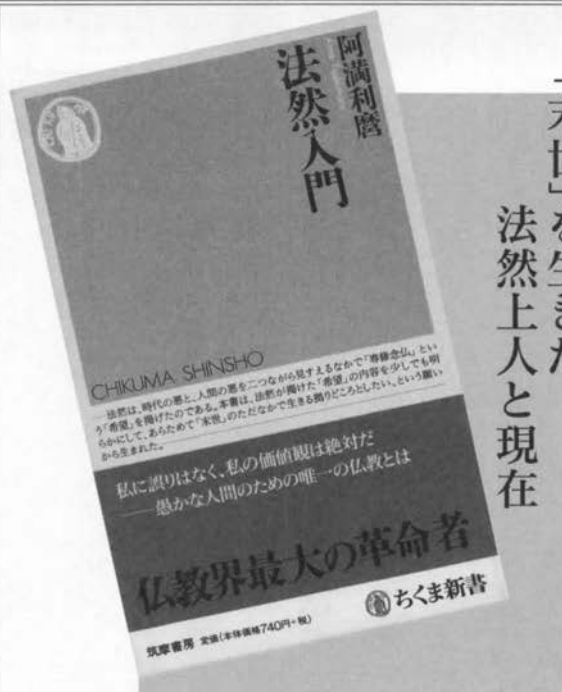
(つづく)

法然入門

阿満利磨 著

「末世」を生きた

法然上人と現在



ちくま新書 定価(本体価格740円+税)

東日本大震災の起きた現在の日本の状況は、13世紀の日本と酷似していないか。

戦乱と天災が連続し、律令制の崩壊した13世紀、人々は希望を失い、まさに「末世」の中にいた。その中で時代の悪と人間の悪を見すえ、「専念仏」という「希望」を掲げた法然上人。

現代は、13世紀よりもはるかに時代の悪と人間の悪は深刻化している。ならば、今こそ見直されるにふさわしい人物は法然上人ではないだろうか。

この外に奥ふかき事を存ぜば、二尊のあわれみにはずれ、本願に
もれ候うべし。

（法然上人「二枚起請文」）

もし私が「心からお念仏を称えさえすれば、阿弥陀さまをはじめ、多くの仏さま・菩薩さまのお守りをいただき、命終えた時には、必ずお浄土への往生が叶いますよ」ということ以外に、奥深い教えを知っていながら隠しているのであれば、あらゆる衆生を救おうとする阿弥陀さまやお釈迦さまのお慈悲に背くこととなり、私自身、阿弥陀さまのお救いから漏れ堕ちてしまうこととなりましよう。

起請文きしょうもん——神仏に向けた嘘偽りのない誓いの言葉——

野党から提出された内閣不信任案の否決に向けて、現総理が前総理にもちかけたトップ会談の合意が袖にされ、なんと前総理が現総理のことをペテン師呼ばわりするという事態が起きました。それを受けた世間の動きを通じ、とある議員は、小学生が首相の発言の真似をして「宿題の提出は一定のめどがついてから」といつてはばからない現状であることを憂え、あるいは、学校の職員会議で子供達に見せたくない番組の一位が国会中継であると真面目に議論されているという笑えない現実を訴えていました。また、昨年十一月の話ですが、時の法務大臣が、自身の「法相就任を祝う会」の席上、「法務大臣は『個別の事案に関しては答弁を差し控えさせていただきます』と『法と証拠に基づいて適切に進めています』という二つの答弁を覚えておけば事足りる」などと放言したことにより、辞任に追い込まれるというドタバタ劇もありました。

これらはいずれも「例によって例の如し」と片付けるべきことなのでしょう。か。「政治の世界の話なのだから、あまり過度な期待はせずにそろそろ大人になりなさい」と言われてしまうのがとどのつまりなのでしょう。そうはいっても、東日本大震災被災地の復興も、私たちの平和な生活も、その陣頭指揮をとってもらうべきは、やはり政治の力以外にはないのであり、とにかくしっか

り頑張つて欲しいと祈りにも似た思いを向けざるを得ません。

それにしても、言葉の重みの大切さを改めて痛感させられる昨今です。なるほど、その人の言葉の内に真実の光を見出せなければ、その言葉が周囲の人々に及ぼす重みも説得力も生まれようはずがありません。ましてや、その言葉によつて、多くの人々が感銘し、あるいは、喜びや感謝の念を抱いて、自ら進んでその言葉に沿つた行動を期待することなど到底不可能でしょう。

法然上人が活躍されていた時代、言葉の重みを示すためにこれ以上ない形として用いられたのが「起請文」です。「起請文」とは、自己の言動に嘘偽りのないことを神仏に誓つて書き記した文書のことです。その当時、多くの僧侶達から「誰にでも修めることができる容易い称名念仏で、阿弥陀仏の極楽浄土への往生など叶うはずもない。智慧第一の法然上人ほどの方が、そんなことを知らないはずはない。浄土往生は、難しい行を修め、立派な寺院や仏像を建立し、造立することによつてはじめて叶えられるのだ。法然上人は、お前達のような、貧しく、愚かな者を憐れんで、少しでも善根功德に縁を結ばせようと称名念仏を勧めているに過ぎないのだ」などと、いかにももつともらしい念仏非難が繰り返されていました。そうした謂れのない非難に対して法然上人は、その生涯

を通じて懇切丁寧に対応し、弟子達の不安の払拭に努めてくれました。

しかし、同様の非難が根絶されることはありませんでした。だからこそ法然上人は、建暦二（一二一二）年正月二十五日、八十歳で往生の素懷を遂げられる、わずか二日前の二十三日、生涯最期の御法語として、「起請文」という形式を採って『一枚起請文』を遺されたのです。『一枚起請文』の「起請文」たる由縁こそ、冒頭に紹介した一節に他なりません。そこには「私が常日頃から申し上げている念仏往生の教えに嘘偽りなどあるはずはなく、もし、私が奥深い教えを知っているながら隠しているというのであれば、私自身が、あらゆる人々を救おうとする仏さまのお慈悲に背くこととなり、救いの働きから漏れ落ちてしまうこととなります」と弥陀・釈迦二尊に向けた嘘偽りのない誓いの言葉が、法然上人ご自身の強い意志と共にしたためられているのです。

もちろん『一枚起請文』に限らず、法然上人の数多のご法語の内に真実の光が宿り、それが多くの人々に感銘を与え、彼等の口から自ずとお念仏があふれ出るようになったのは言うまでもありません。『一枚起請文』の御撰述、法然上人の浄土往生から今年で八百年、「起請文」という形に込められた法然上人の強い思いをかみしめて、お念仏に励んで参りましょう。

合掌

（林田康順）

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第二十五回

第二部

ライオン
来江の古城遙かなり

ドイツに台頭する
「サーベル主義」を危ぶむ



若きドイツ士官に 俳画を贈る

渡辺海旭がドイツに渡って六年が過ぎた。

留学当初は、ドイツの興隆ぶりに圧倒され、日本もドイツに大いに学ばなければならぬと感じたものだが、やがて、ドイツ帝国の「明」ばかりでなく、けっして学ぶべきではない「暗」をも知るようになった。

その「暗」の最たるものとは、海旭が留学した時分から年を追うごとに加速するプロシアの陸海軍の膨張であり、それにともなう軍の腐敗であった。

実は当初海旭は、ここドイツの軍人たちをむしろ好ましく受けとめていた。しかし、何事にも表と裏があるが、とりわけ軍隊におけるその落差は大きい。もし海旭がドイツ軍部の表だけしか知らなかったとしたら、海旭は彼の地の軍というものについて大いなる誤解をもちつづけていたことだろう。その結果、ドイツ社会への理解が一面的になっていたか

もしれない。それはひるがえって帰国後の海旭の日本社会への理解をも一面的にし、海旭の活動にも大きな偏りを与えたかもしれないかった。

当初海旭が軍に好印象を抱いたのは、たまに出会った若い士官、T中尉によるものだった。中尉は海旭とほぼ同年代で、海旭のアパートの隣室に一家で住んでいた。はじめはたまに出会うときに、会釈を交わす位だった。ある日、スマレの束をかかえているのを見かけて、軍服と可憐な春の野草との奇妙なコントラストに興味をおぼえ、それはなにかと訊ねた。

「千本スマレといって、この時節になると、妻や下女、従卒総がかりでつくるのです」という中尉の答えに、「後学のためにみせていただけないか」と頼むと、ほどなくして従卒にもたせて持参してくれた。大きな皿に白砂を盛って、そこにスマレの花を隙もなく挿したものだった。何事につけドイツ人の質実剛健ぶりをみせつけられてきた海旭は、その繊

細かつ優雅な趣きに違和と衝撃をうけた。

まだ浅き春を遊ぶという興趣は、七草をはじめ季節の花鳥風月を愛でる日本人の心性に響くものがあつた。「けっこうなものを見せていただいた」と海旭が感想をもらすと、中尉は自宅へ招いて、夫人手ずからチョコレートケーキとコーヒーでもてなしてくれた。思いもかけぬ饗応に、海旭は大いに画趣をもよおし、自室へ戻ると、たちどころに浮かんだ数句を添えて「俳画」にしたてて、御礼がわりに中尉の一家に贈った。

千本の 莖に更けぬ 春の夜や

従卒も 千本莖 助けけり

シヨコラ召す 千本莖 はてて後

淡雪や 千本莖 贈る人

千本莖 摘みたる村の 塔古し

千本の 莖千種の 話かな

ドイツ人でも軍人に対して俳句の解説をすることにはずいぶんと苦勞したが、それ

でも日独の文化ギャップを埋めるやりとりが
かえつて二人の間に親しみをうみ、以来なにか
というと、中尉の家に招かれては、酒と食
事の接待をうけ、昵懇^{じこん}になったのだった。

鉄血軍人にも燕尾服

さらに中尉が媒介となつて、中尉の友人の
士官連中とも付き合いができ、世界に冠たる
ドイツ帝国軍の若き幹部候補たちの雰囲気を知
ることもできた。それは、中尉と家族ぐる
みの付き合いができて数ヵ月後、復活祭のパ
ーティーに招かれたときのことだった。

仏教僧がキリスト教の祭りの、それも軍人
のパーティに乱入するのには、いささかため
らいもあつたが、そこはなにごとく経験とい
う持ち前の好奇心で、海旭は受けることにし
た。

せいぜいめかしてこいと言われていたので、
一張羅の燕尾服を着込み、髪の毛をポマード
でオールバックにきっちり固めて出かけてみ
ると、会場で海旭を待ち受けていた中尉の変

身ぶりに、海旭は思わず「本当に、あなたは、わがお隣りの中尉殿か」と叫んでいた。

馬子にも衣装ならぬ、鉄血軍人にも燕尾服だった。紹介された友人たちも、みな同様に背びれの割れた正装と白のネクタイ。そして、なかには仮面をかむって、腰のくびれをきりと締め上げたパツフルドレスの淑女を同伴している洒落者もいた。

それぞれの自己紹介を聞き終えて、「まるで鹿鳴館だ」と海旭はつぶやいた。

中尉が「ロクメイカン？」と問い返すのに、海旭は「錦絵でしかみたことがないが」と前置きをしたうえで次のように解説をした。

列強の圧力に屈して結んでしまった不平等条約をなんとか解消・撤回させることは、維新をなしとげた明治政府の威信をかけた悲願であった。伊藤博文と井上馨外相の発案といわれるが、そのために編み出されたのが、西欧化のショールームとしての鹿鳴館であった。そこで在日公使館の外交官らを招いて夜な夜な夜会や舞踏会を催し、日本の貴顕が接

待をすることで、日本の西欧化を印象付け、条約改正につなげようという思惑である。

しかしながら、社交ダンスを踊れる貴婦人などほとんどいないため、芸者を「影貴婦人」に仕立て上げということもあり、在日列強の外交官からは表向きはともかく内心では「猿真似」との失笑を買い、いつぼう国粋主義者たちからは国辱との批判もあり、鹿鳴館は条約改正の実に貢献することなく、わずか七年の命で閉館を余儀なくされた。そんな説明をひとしきりしてから、海旭はこうまとめたのだった。

「先般の日露戦争の戦勝で、鹿鳴館であえなくついでた条約改正のチャンスがおとずれているのは、なんとも歴史の皮肉というべきだ。華やかな舞踏会ではなく、やはりサーベルが決め手なのだろうか。宗教家にとってはなんともやりきれない皮肉だが……」

「皮肉でもなんでもなく、それこそが歴史の本質だ」とすかさず中尉から合いの手が入った。「ロクメイカンとやらは何たる愚作。あ

きれ果てるほかない。軍事なくして外交なしだ。それにしても、ほんとうに日本は大国・ロシア相手によく戦った、よくやった、おめでとう」

「日本人を代表して、ありがとうと大いに礼を言いたいところだが」と海旭は応じた。「日露の戦いをめぐっても皮肉を味わった」

「皮肉とは？」と中尉が訊き返した。

「僕は坊主のくせに主戦論、つまり日本はロシアを断固うつぶしと主張した。日本の仲間たちは非戦論で圧倒的少数意見だった。僕の主戦論の眼目は、亡命ロシアの革命党員の諸君たちから、日本が祖国を打ち負かしてくればツァーリの圧政にあえいでいる貧しき人々が救われると訴えられたからだ。僕が少数派だったのは、祖国の宗教家の中だけではない、ここドイツにおいても同様だった。新聞はもちろん、わが下宿の女主人からも、極東の小国が軍事大国ロシアに勝てるはずもない、勝ち目のない戦さをしてどうする、と言われたものだ。そして、諸君たち軍人さんた

ちもそうではなかったのか。結果は、軍事にはまったくの素人の東洋の坊主のいうとおりになった。これを歴史の皮肉と言わずしてなと言おうか」

そう言い終えて海旭は中尉と仲間たちを見回した。

「ワタナベの言うとおりだ。まことに面目ない」と中尉は頭をかいた。「正直いって、この中でも日本が勝つと思うものはいなかったのではないかな。かくいう僕だって、まさか極東のちっぽけな島国が、大ロシア帝国を相手に勝てるはずはないと思っていたよ。なにしろ国家予算でロシアは日本の八倍だ、常備兵力にいたっては十八倍もロシアが多い。諸君、どうだ、勝てると思っていたやつがいたら拳手をしろ」

中尉は周囲を見回したが、手を上げるものはひとりもいなかった。

「軍事の専門家たる人間が戦争の勝敗の判定をあやまつとは、いやはや、おはずかしい」と中尉が言うのへ、仮面の士官が言った。

「なんのなんの、わがプロシア陸軍にも救いはある。わがメッセル参謀次長殿だ。メッセル参謀は日露開戦の行方を問われてこう言われたそうさ。日本の総大将はわが教え子の児玉源太郎だ、児玉がいるかぎり日本は絶対に勝つと。まさに慧眼というべきだろう。メッセルとメッセルを重用するわがモルトケ元帥があるかぎり、軍部の眼鏡が曇ることはなからう。わがドイツ帝国陸軍は健在なりだ」

メッセルとは、普仏戦争で勲功をあげたドイツ帝国陸軍の気鋭の参謀だったが、明治十八年、海旭が十三歳で小僧奉公に出された年に、ドイツ式の軍制を導入したいという日本の要請に応え、モルトケ元帥の推挙によって来日。その年に開校した大日本帝国陸軍大学の教師として、三年間、日本陸軍の近代化の指導にあたった。そのとき初代陸軍大学の校長が児玉源太郎であった。メッセルの持論は、緒戦の勝利こそ肝要だとする「先制」論。その薰陶をよく受けた児玉ら教え子たちの活躍によって、日清・日露の両大戦では、

敵の機先をよく制して、近代化まもない日本に勝利をもたらした。なお、児玉は満州軍総参謀長として日本を勝利に導くために全霊を傾注したからだろう、戦後八ヶ月で急逝した。メッセルは明治二十一年に故国ドイツにもどるや、参謀次長にのほりつめ、その令名は若き士官の間でも憧れをもって知られていた。

「日本がロシアに勝てたのは、わが古きよきプロシア陸軍に学んだからだ」と中尉は海旭に向かって言ってから、顔の向きを仲間たちへと変えた。「諸君たちも先刻ご承知のことでありと思うが、日本がロシアに勝ったことで、わがドイツの主たる仮想敵はイギリスとなった。これはこれで厄介なことになりつつある。おかげで、わが国海軍ののさばりようといったらない……」

(つづく)

浄土誌上句会

●点

〔特選〕
ずれやすき点眼今朝は涼しくて 増田 信子

朝一番の点眼である。猛暑日・熱帯夜の続
いていたのが、今朝は涼しくて、そのせいで
もないだろうが、両眼ともどうもうまくいか
ない。目をそれで頬を伝っていくのが、ひや
りとして、もう秋が近いのだと思う。

〔佳作〕 一点の星きらきらとほととぎす

河合富美枝

点々と雪溪を踏む小さき影

町村 亮一

揚げ花火点りかねいる街路灯

中村 真一

●灯

〔特選〕
箱庭を灯せば夜の来ていたり 笠井 亜子

灯をともしようになっているのだから、店
の前にでもあるのだろうか。思いついてその
灯をともし、辺りを見回すと、あたりはもう

暮れて、家々は灯をともしている。灯せば夜が来ていたというところ焦点である。

〈佳作〉

懷中電灯大きく回す登山駅

柄本 圭子

齒科の灯にサボテンの芽のうす緑

山口 信子

梅雨の月灯台下の小暗がり

浜口 佳春

●自由題

〈特選〉流れ藻の舟包むごと迫り来る

石原

新

ほんだわらなどが一まとまりになって、漂流するものである。稚魚などがそれを頼っているのもあり、はるばる潮流に乗ってくる。作者は釣りをしているのだろう。大きな藻の固まりが、舟を囲むばかりに迫ってくる。

〈佳作〉

髪洗いあげて夕日の窓辺かな

江藤 美美

枯れしかと思ふ無花果葉をつけぬ

村上 青女

紫陽花の藍に始まる雨の路地

池田 伊吹



浄土の広場

誌上句会 (編集部選)

■点

点者には点者の気負い夏の宵
炎昼や句読点なきメール打つ
紫陽花の満点顔をしていたり
点線に沿って歩けば蝸牛
点描の岬バラソルそして風
青あらし一人欠けたる点呼かな
梅雨寒く東京駅に点と線
桑の実や写真が点す旧駅舎
点景となりゆく船や夏の海
原点は涼しき森の匂いかな
週末の点景としてハンモック

佐藤雅子
森 懐人
井口吾郎
鳥羽 梓
小林苑を
山内桃児
目黒 裕
中嶋いづる
鍋谷宗治
紺野 敬
前田由美子

浄土誌上句会の お知らせ

兼題
季語ではありません

自然白 自由題

締切・二〇一一年九月二十日

発表・『浄土』二〇一一年十一月号

選者・増田河郎子 (『南風』主筆)

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

●葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

■灯

街なかの一灯淡く夏の月
仏灯に薄日さしくる青簾
夏静か漁の灯遠く近く見ゆ
仏壇に灯のぼうぼうとさくらんぼ
灯るときぼつと音して緑の夜
桑の実の古き社を点すこと
街灯のように微雨に立つており
夜店の灯点りて駅が遠くなる
灯台の痕跡がある夏の坂
この街に灯りちらちら金魚草
梅青き実のほつぽつと灯りけり

■自由題

紫陽花の大きな花ぶさをみほとけに
寺裏の川が浄土やこぼれ驚
琴の音よ古き悲しき想いあり
緑陰のなんとか主の命かな
凶暴なほどの青葉となりけり
サイダーぐいっと列車でゆく自由
路地裏で打つ拍手やアマリリス
石に降り緑雨は水にもどりけり
日盛りや開けっぱなしの下駄箱見え
影踏み影がなくなる半夏生
汐留に海月浮くころ腹すきぬ
停車場の古き階段より薄暑
機関車を降りてゆくなら夏野原

河合富美枝

佐藤雅子

森 懐人

山口裕子

村田 篠

井口 栞

目黒 裕

鍋谷宗治

紺野 敬

相川祐司

江藤美実

河合富美枝

佐藤雅子

飯島英徳

斉田 仁

内藤隼人

山口裕子

中嶋いづる

村田 篠

鳥羽 梓

山内桃児

工藤 掉

井口吾郎

山内桃児



83

かい目

さっちゃんねネッ

かまち♡ひろう

かまちひろう先生作新聞四コマ漫画「ゴンちゃん」が各地方新聞に掲載されています。(静岡新聞・山梨日々新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日々新聞・新日本海新聞・山形新聞・長崎新聞・岐阜新聞・以上朝刊。中国新聞・神戸新聞、以上夕刊)



編集後記

秋の雲まだまだ深し青い鳥

岱潤

先日本屋で『青い鳥のゆくえ』という五木寛之さんの文庫本に目が留まり買い求めて読んでみた。この随筆自体が九五年初出ということで、十六年も前の作品であるし、何よりも基となるメーテルリンクの戯曲『青い鳥』は、一九〇八年初演ということであるから、実に一〇〇年以上も前の作品である。

しかし読み終えた感想は、まさに現在、三月十一日以降の日本、日本人の状況を表していると言えそうだ。

『青い鳥』という戯曲を、五木さんもそして私も単純に、以前は幸せを求め、遠

くまで旅をし、いろいろな苦勞を重ねるが、結局得ることができずに戻ってきた家で、いわゆる日常の生活の中に見出し、

「幸せって、こういうことだったんだね」で終わる、そんな教訓的な物語だと思っていたが、実は全く違って、家にいた青い鳥が逃げて行ってしまいう結末だった。つまり日常の中に幸せを見出し、幸せは特別なことではない、いつも通りの生活ができる安全と安心の中にあるのだと気がついたとき、その安全、安心が無くなってしまう。もう遅いと告げられる。そんな絶望的で虚無的な物語だった。正に今の日本人そのものではないだろうか。戯曲では最後にチルチルが「どうか青

い鳥を捜して返してください。私たちにどうしてもあの青い鳥が必要なのです」と叫ぶ場面が終わっている。私たちにも希望や生きがいそして念仏が、どうしても必要だと言えらるだろう。(長)

編集チーフ 長谷川岱潤
編集スタッフ 斎藤光道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
蔵谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大超(焼津・光心寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(大本山清浄華院)
脇 博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山光明寺)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>

浄土

七十七巻九月号 頒価六百元
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十三年八月二十日

発行 平成二十三年九月一日

発行人 佐藤良純

編集人 大室了皓

印刷所 株式会社 シーティリー

〒一〇五〇〇一一
東京都港区芝公園四・七・四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三三・五七八・六九四七

FAX 〇三三・五七八・七〇三六

振替 〇〇二・八〇・八・八二八七

清水阿弥陀堂

清水寺の本堂より奥の院へ行く手前に阿弥陀堂があります。法然上人は清水寺で円頓戒を説かれ、次にお念仏の教えをねんごろに勧められたのです。清水寺の沙弥印蔵はこの教えを聞き、深く阿弥陀さまの御本願を信じ、ひたすらお念仏の教えに帰依されることとなりました。そして文治4年

(1188)、阿弥陀堂（瀧山寺と呼ばれていた）を道場として不断念仏三昧を始められました。恵心僧都御作の阿弥陀如来像が安置され、後柏原天皇（1500～1526）の「日本最初常行念仏堂」の勅額が掲げられています。



法然上人鑽仰会の

本

当会発行の書籍、雑誌
のお求めは、当会へ直接
お申し込みください。

なお、月刊『浄土』を除き送料は
含まれておりません。別途実費を
申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036

こうるじっぽう 響流十方

其の二

袖山榮輝・林田康順・小村正孝

法然上人鑽仰会

響流十方こうるじっぽう

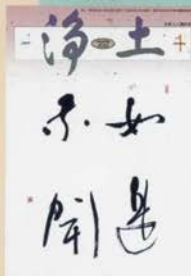
其の二

640円(税別)

響流十方こうるじっぽう
600円(税別)



月刊『浄土』
バックナンバー



『念佛讀本』完全復刻版
1,600円(税別)



「法然上人絵伝絵葉書」
(8枚セット)500円(税別)



※浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠二巻本」より